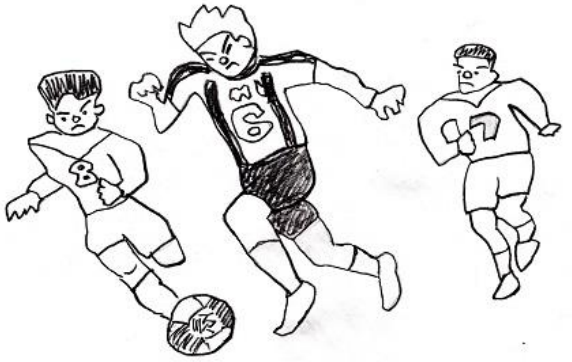
学校現場から悲鳴が聞こえる

第１８回「進路指導が大人の都合で行われてはいないか」

前号では中学校の進路指導をめぐって「やるべきこととやらなくてもいいこと」ということを取り上げました。「あれもやるこれもやる」という一種の強迫観念に縛られている現場の実態が明らかになりました。今回は、高校受験をめぐって中学校側からみた高校への疑問点や矛盾などを語っていただきました。



記者 私は高校に勤めていましたが、中学校の先生からは高校をどのようにみているのでしょうか。

Uさん 私立高校の特待生制度ですが、成績の良い生徒を無償で受け入れ、その経費を一般入学の生徒から補填する。勉強面でも運動面でもさほど目立ったものがない生徒は高いお金を払って高校卒業資格を得る。優秀な生徒は有名大学に進学してその高校の営業実績となる。個々の私立高校が悪いというのではなく、強者が全てを手にし、弱者は強者に奉仕する資本主義の論理を教育に持ち込んでいることに問題があり、進路指導をしながら心苦しく思うことがあります。公立高校の前期選抜についても、「多様な観点から生徒を評価する」という趣旨そのものには異論はありませんが、現実には部活動実績を中心として高校側が欲しい生徒を囲い込む制度になっているように感じます。

記者 高校では、県でベスト４とかインターハイなどに出場するような部活動顧問の発言力が合否に影響を与えているということは無いとは言えないと思います。学校によっては生徒会活動や部活動、ボランティア活動などの経験をポイント制にして計算し、「多様な観点」として合否の判断にしているようです。

Uさん 公平、公正に判断しているものと思いますが、制度が「生徒のため」ではなく「大人の都合」で動いていると思われることがあります。ある運動部の顧問をしていた時ですが、有望な選手がいました。いくつもの高校からオファーが来ました。ところが本人が希望していた高校からは特待生枠の関係なのか正式なオファーは来ませんでした。生徒は悩んだ結果、正式にオファーがあった高校から進学校を決め、返事をしました。すると生徒が希望していた高校の監督が突然、私がいない時に本人に直接話をしに来ました。生徒は大いに悩み、最終的にはその高校に進学しました。生徒と私で進学を決めていた高校へ謝罪に行きました。生徒には「自分の人生なのだから、大人の事情は気にしないで行きたいところへ行きなさい」と言いましたが、先ほどの高校のやり方には本当に腹が立ちました。

別の運動部でも同じようなことがありました。希望していた高校からのオファーがなく、すでにオファーが来ていた高校の中から進学校を決めたところ、希望していた高校へ進学していた先輩から練習に来るように伝えられ、練習参加後の 12 月にオファーが来ました。生徒は

気が変わってその高校を受験しました。先輩が勝手に誘ったのか、顧問から何か言われて誘ったのかはわかりませんが、大人の都合で子どもを振り回していると思いました。

記者 こうした事例は氷山の一角で、公立私立を問わず他の高校にもたくさんあるように思います。進路指導の難しさを感じます。

高校側には部活動の強化による生徒集めもありますが、生き残りをかけて多様な学科再編もよく見られます。目新しい学科を新設しては募集停止になるということが繰り返されてきましたがどのように思いますか。

Uさん 確かに生徒を集めるための安易な学科の創設は気になります。スポーツ科や美術科など、本当にその分野の勉強を究めたいと思って希望する生徒はまれです。実際には目の前の勉強から逃げて、その学科を選んでいる生徒がほとんどで、この選択は本当にこの生徒のためになるのだろうか、と迷いながらの進路指導となっています。

話は変わりますが、生徒の学習のことです。授業を聞かずに塾のワークをやっている生徒が必ずいます。学校教育は、人格の完成を目指しているので、直接的には高校の合格に結びつかない勉強もします。私は直接合格に結びつかない勉強こそが大切と思っています。しかし、それを無駄と考え、高校合格のためのテクニックを覚えることが勉強だと勘違いしている生徒も保護者も、あるいは教員も少なからずいます。そして、そういう生徒が合格する。短期的に見ると得をしてしまうため、それが悪いことだと認識されにくいところがあります。また、学校側（中学も高校も）でも「人格の完成よりも学力の向上＝点数の向上」を目指している部分もあり、この不毛な点取り競争を助長しているといっても過言ではありません。

記者 私もいわゆる受験科目の教員ではなかったので、同じような事を経験しています。３年生になると１月の授業は本人が申し出れば授業以外の科目を勉強してもいいということを学校で決めています。とんでもないことですがいわゆる内職の黙認です。あるときそういう生徒がいました。私は私の授業の大切さを伝えてそのまま行いましたが、気分はいいものではないですね。

Uさん 前号でも言いましたが、学校には無駄なことを無駄と言いにくい「文化」があります。願書や志望理由書などを細かくチェックします。ちょっとした字の癖や印鑑の押し具合もチェックします。私は「受検できればいいのだから細かくやる必要はない」と言うのですが、なかなか変わりません。髪の毛を縛る位置は耳の中心線よりも下とするなんてバカバカしい校則もあります。無駄な仕事はなくして、生徒のためになる仕事に時間を費やしたいものですが、無駄なことを細かくやる人が「仕事が出来る人」と見なされる「学校文化」があると思います。でも、こうした競争と強制で子どもたちを締め付けて管理するやり方に疑問を持つ人が増えているように感じます。それはＳＮＳの発達で、感じた疑問を表現する環境も整ってきています。若い先生たちには「この仕事は本当に子どもたちのためになっているのだろうか」と一旦立ち止まって考えて欲しいと思います。

記者 進路指導をめぐる問題や矛盾を出して頂きましたが、どれだけ子どもを真ん中にした教育が出来ているかが問われているのではないかと思います。そして、そのことに若い先生たちが気づき始めていることにこれからの展望が見えてくるようで少し安心しました。